黒星、いち。

加斗夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒星、いち。

【Ｎコード】
Ｎ６８２５Ｖ

【作者名】
加斗夜

【あらすじ】
バスケの強豪校に入った弱小チーム上がりの主人公、蓑川。チームの仲間と共にプレーができない自分の非力さをかみしめながら、それでも自分に出来ることを精一杯やっていく。
白星で埋まる紙に、唯一残る黒星は……。
※文芸部部誌にて掲載した作品を転載

（前書き）

文芸部部誌にて掲載したものを、少しの手直しで転載しました。今後もこのような形で作品を投稿することがあるかと思います。ご意見、ご感想など、遠慮なくぶつけていただければ、ありがたいです。

碁盤目状に区切られた紙の上には、沢山の白丸が並んでいた。カレンダーや予定表などの、沢山の紙にうずもれるように壁に貼られたそれに手をかけて、また新たな円を足す。

「白星、いち」

そう、小さく呟きながら。

自分が書いた円の歪さを笑いながら、誰もいない部屋を出る。外は薄暗く、夕闇に包まれようとしていた。

一、

高校バスケは、夏のインターハイと冬のウィンターカップという二つの大きな大会を有す。全国という華々しい舞台に立つためには、この二大会のうちで結果を出さなければならない。

言葉にするのは簡単でも、そんな大舞台に関わるなど限られたごく少数にしかできないことだし、その中でプレーをする、さらに活躍をするなどと言えばそれは、大海原でぽつりと浮かぶ島を見つけるも同然の幸運と、そこに向かって船をこぎ続けられるほどの力を持ち合わせていなければ、到底なしえることではない。

蓑川（みのかわ）は、その限られた少数に入ることを許された幸運な人間だった。幾度も全国制覇を成し遂げている屈指の強豪校に入り、そこのバスケ部員として練習を重ねる日々を送っていた。

けれどその幸運な彼も、全国という遠い島にたどり着けるほどの力は持ち合わせていなかった。彼の立場はただ、こうだ。

「全国レベルのバスケ部の、その他大勢」

ハイレベルな競争相手の中で、中学では初戦敗退が当たり前だっ

た自分がのし上がるなど、夢の見すぎだ。
初めての練習からずっと、そう言って自らを戒めてきたはずの彼は、インターハイ予選決勝が行われている今、三年という立場にありながらギャラリーに立って試合を眺めることしかできない自分に大きないら立ちを覚えていた。

残り一ピリオドを残して、点差は八十。蓑川の高校は随分前からスタメンを下げ、今は二年含むベンチメンバー主体に切り替えている。三年である蓑川を、ギャラリーにおいていながら。実のところ、彼がギャラリーにいるのにはある理由があった。彼は、チーム内で彼が最も得意なことを、その目と頭を使ってひたすら行っていたのだ。それは、ひとつの“ポジション”と言ってもいいかもしれない。ギャラリーという位置から、試合に参加する特異な選手。

けれど、そんな言葉で自らを慰めてみても、結局試合に出られないのは、自分に力がないせいなのだった。根本的に、他の部員とは持っているものが違うからなのだった。

ドリブルのキレも、パスの正確さも、シュートの美しさも、何をとっても自分は他の選手にまるで届いていない。それは努力でどうにかできるような、甘ったるいものではない。厳然たる“才能”の差だ。

誰と何を比べても勝てない現実を何度も見て、けれどバスケを嫌えないジレンマ。

だから彼は、才能のない自分を呪い、自分でもどうしていいかわからない感情を持て余すまま、ギャラリーに立つ理由というものにしがみついて、試合を眺め続けるのだ。

また一回、ボールがネットを鳴らした。

白星、いち。
紙にまた一つ、円が書き足される。

二、

蓑川は、疲れ果ててぼろぼろになった体を引きずるようにして、帰路をたどっていた。毎日の練習は、さすが全国区とぼやきたくなるくらい、辛く苦しい。

とにかく基礎体力がなければ話にならないからと、走り込みは拷問のよう。ボールを扱えない選手など意味をなさないからと、ドリブルから始まり、パス、シュートのドリルは殺人的。スリーメンという言葉は、それだけでもはや死刑宣告だ。

基礎ができなければ、何も始まらない。わかっているようで、実は多くのチームで真に理解されていないそれを、蓑川の部活では強烈な形で叩き込まれる。

入部して最初。一年は三年に、ぼこぼこに倒されるのだ。

突然、三年との紅白試合を申し渡された蓑川たちは、困惑した顔でキャプテンを見た。「冗談ですよね？」という意味を込めた全員の視線を、この人はどうやら笑って黙殺するつもりらしいとわかると、今度はその隣の監督らしき禿げた国語の教師に目を向け、同じ意味の視線を送る。

けれど今度の視線には、全国を制すほどの先輩たちと戦えなどとほざく頭のおかしい人はこいつか、などといった非難じみた感情も、

少なからず含まれていた。
　ふくよかな体型のどう見たって運動は苦手そうな教師が、いっちょまえに監督らしいことを言ってやろうと的外れな行動をとってしまっているのだろうと、全員が呆れとともに推測をする。実際、そういう見栄を張って失敗するタイプの教師も、時々いるのだ。
　と、そんな微妙に悪くなっている雰囲気の中で、終始仏頂面を貫く教師の代わりに口を開いたのは、ずっと笑っているだけだったキャプテンのほうだった。
「ああ、言っとくけどこの先生はただの顧問の先生で、監督は俺が兼任してるから。つーわけで、いかにも文句がありそうな雰囲気だが、言えば俺が聞いてやるぞ？」
　そう言って楽しげな笑みを浮かべ続けるキャプテンは、どこか気まずそうに顔を伏せる一年を見渡すと、文句が出るのをしばし待つ。その顔に浮かぶ笑顔に押されて一年全員が心の中で存分に懺悔をしたころ、ふとキャプテンが「ま、俺らも通ってきた道だからな、心配すんな」と意味深な言葉を漏らした。
　気まずい雰囲気が破れたことで一年が顔を上げたとき、やっと練習が開始された。

　アップと、少しのボール慣らしを終えて。
「これ、勝っちゃってもいいんだよな？」
　そう言って余裕の笑みでコートに出て行ったのは、現在のキャプテンを務める永山（ながやま）だった。全中準優勝の経験を持つ彼は蓑川の小学校時代の幼馴染で、彼にバスケを教えたのも、この永山だ。
　スポーツ万能、成績優秀、ついでにイケメンと三拍子そろった嫌味な奴なのに、それを鼻にかけることもない、本当に嫌な人間。プレーもそれに勝るとも劣らぬほど嫌味で、外も中もいけるオールラウンダータイプ。少々一人よがりなところを除けば、一年のうちではおそらく最も上手いであろう一人である。

コートに出た永山は、即席で作った五人組の中でポジションなんかをぼそぼそと話し合っていた。まず名前から教えあう面倒臭さに、五人がともに辟易しているのが、壁際に立っている蓑川にも見て取れる。

即席のチームでは、作戦を立てるなどと言うことはまず望めない。お互いがどれだけできるのか、どんなプレーを得意とするのか、そんなことがなに一つわからないからだ。ただパスを出すことにさえ気を遣うような状況で、まして自分の考える作戦を皆にやってもらうことなど、できるわけもない。ポジションと、ディフェンスにつく相手だけ決めて、あとは各自の力に任せて、それぞれが突っ込んでいくくらいしか考えようがないのだ。

たぶん、永山達もそういう結論に至ったのだろう。適当に「がんばろう」などと声を掛け合って、早々に整列し始める。

一方、蓑川の方も、最初に三年と試合をするグループの一人になり、永山のいる隣のコートを気にしながらも壁際を離れ、自分の組むメンバーと顔合わせをしていた。

一年でありながら身長が百八十を軽く超える素晴らしい体格の持ち主が二人。気弱そうだけど、いかにもシューターっぽいのが一人。やけにハイテンションで、ドリブルテクで勝ち上がってきてそうなちびが一人。

「えーと……蓑川って言います。中学んときのポジションは、フォワードで、一応スリーもそこそこ打てるって感じです」

「そこそこってどんくらい？」

だいぶよそよそしい口調で自己紹介をした蓑川に、そのやけにハイテンションなやつが、軽い調子で突っ込みを入れた。

蓑川は正直、初対面から馴れ馴れしい態度をとるような奴は苦手だった。とはいえ、ともに試合をする以上、いちいちそんなことに構うのもばからしいことである。とりあえず面倒くさいと思いながらも、答えを返す。

「シュート率は、だいたい一律で三分の一くらい。調子よければ二本に一本は入ったりするけど。で、そっちは？」
「ああ、俺？　野口だよ。ポジションは同じくフォワード。なりがこれだからスリーは正直無理だけど、ドライブなら割と自信ある」
百五十少しといった程度の野口は、そう言ってからからと笑った。その後も、矢継ぎ早に聞いてもいないことをぺらぺらとしゃべりだす野口に、いちいち対応するのに疲れてきた蓑川がほかの三人に目を向けると、「大変そうだね」とばかりに苦笑いされてしまう。しょうがなく自分から他の三人に話を振ってなんとか全員の名前とポジションを把握していった。
けれどやっぱりそこで、話は止まってしまった。
なにか話さなければならないことがあるような気がしつつも、なんとなく声を出せない気まずい状況で、先輩たちが軽く体を動かしながらコートに入ってくるのを眺める。そろそろ整列しなければならないからと、それ以上なにを話すこともなくコートの真ん中へ向かったとき、蓑川は急に野口に肩をつかまれた。
「お前、スリーがんばれ。俺が切り込んで、ディフェンス寄せるから、俺の後ろまわってスリーのラインで待ってろ。適当にパス出してく」
耳に寄せられた口から告げられたのは、初対面の相手に対して簡単に提案などしにくい、作戦、だった。
バスケ経験者なら、誰でも思いつく簡単な作戦ではあった。むしろ、作戦と呼ぶにもふさわしくないほど、ちゃちなものであったかもしれない。
けれど、苦手だったはずの野口のその言葉を聞いて、はっとさせられたのは確かだった。話しづらいというのが当たり前だと思っていたけど、そういう問題じゃない。敵の敵は味方なわけで、味方同士なら、敵を倒すために結束するのが、本当の“当たり前”のことだ。
そんなことを簡単に人に教えられる野口は、いつかレギュラーに

も、笑いながらなっちまうんだろうな。
残り三人にさっきの作戦を伝え、ついでにいくつかの指示を言っていく野口を見ながら、蓑川はそんな思いを抱いていた。

現在、レギュラーのポイントガードは、その野口が務めている。軽いように見えて、その実かなり冷静な彼の試合運びは、いつみても見事の一言に尽きた。

そして始まる、先輩との試合。
いくらメンバーが揃おうとも、一年のくせに三年に勝てるとは、さすがに考えられなかった。実際、本当に勝つつもりで試合に臨んでいたのなんて、永山くらいのものだっただろう。それぞれが、先輩の胸を借りるくらいの気持ちで、せめて僅差を保ってやろう、程度に思っていたはずだ。
それでも、結果は予想外過ぎた。

五十六対七

たった二ピリオドの試合で、きっかり、八倍。
一年の得点は、蓑川のスリーが一本に、強引に突っ込みにいった野口の、本来ならオフェンスファウルの筈のドライブに、おまけでついたフリースロー二本。後は、たまたまゴール前に落ちたボールがたまたま味方の目の前にいった結果打てたというだけの、まぐれの一本。
要するに、狙わなければいけない筈の確実なシュートは、ひとつとして打たせてもらえていなかった。
それほどの差が、あった。

隣のコートを見る。
審判が走り去って見えたボードにならぶ数字は、こちらとそう変

わらないほどの大差を示していた。
コートの中央で、膝を殴りつける永山の姿が見つける。足元に転がるボールが、まるで悔しがる永山をあざけるかのように、汗でぬれた表面を光らせる。

先輩のプレーは、ひたすら美しかった。
ドリブル、パス、シュートのどれをとっても無駄が見当たらない。きっちりと運び、回し、決める。どこにもミスは起きず、逆にミスを見つければそこを正確に狙う。
地味さにもつながる堅実さは、洗練されているがゆえに美しく映る。
悔しがり続ける永山や野口、呆け続ける他の選手と違い、蓑川はひたすら、先輩のプレーを思い起こしていた。
「あれをやりたい」
そう、心から思っていた。

試合後、ミーティング中にもかかわらず全力で悔しがる永山を蓑川は言葉を尽くして慰めていた。
三年に負けたって恥ではない。まだ入ったばかりだ。リベンジのチャンスなんていくらでもある。
けれど言葉を垂れ流しながら、彼自身が、自分の言葉の弱さに気づいていた。それはそうだ。蓑川は、強い悔しさを感じていなかったのだ。もちろん、悔しさがなかったわけではない。ああまで完敗させられて、何も感じないでいられるほど冷めた人間ではないのだから。
けれど彼は、悔しいと思う以上に、先輩のプレーに惚れていた。完璧ともいえるそのプレーは、全員がきれいに歯車としてはまりこみ、円滑なパスワークをしなければ実現はしない。
ミスをしないという最も難しいことをやってのける先輩たちに、

あこがれていたのだ。
けれど、負けて悔しがるどころか、負かされた相手のプレーにあこがれるなんて恥ずべきことのように思えて、同時に、永山を慰めていれば、悔しがる自分を見つけられるかもしれないと思って、蓑川はひたすら口を動かしていた。
そんなとき、キャプテンがふいに彼を呼んだ。
一瞬、誰が呼ばれたのかわからなかった。もう一度名前を呼ばれて自分だとわかると今度は、ぼろぼろに負けた試合の中でも、特に目立った活躍をしたわけでもない自分なんかが何故、と疑問が立った。失敗は多かったものの、野口や他の三人のほうがよほど積極的に攻め、がむしゃらにやっていた。困惑する彼を周りも「なんであいつが？」と露骨に示しながら眺めている。
二、三回「俺ですか？」と聞き返して時間をくっていると、キャプテンの笑顔が少々崩れてきたことに気づく。あわてて彼が前に出ると、すぐに何事もなかったかのように笑顔を取り戻す。
キャプテンは、知らない人ばかりの前に立たされ、緊張する彼の肩に腕を回し、安心させるようにその腕で彼を軽くたたくと、言った。
「今日の試合の感想をどうぞ」
マイクのように突き出されたキャプテンの左手を呆然と見て、またキャプテンの顔を見上げる。何度も思い浮かべた、何故自分が、という疑問がまた首をもたげていた。
「ん、感想なんもないのか？」
キャプテンの覗き込んでくる笑顔が怖くて一歩引くと、肩に回された腕に力がこもる。半分抱き寄せられたようなかたちになり、大きく恐怖をあおられる。それでも何か言わなければと、とりあえず口を開いた。
「悔しかった、です」
漏れたのは、空虚なそんな言葉。いくら、感じた悔しさが弱いといっても、自分の言ったその言葉に、あまりに実感がこもらないことに蓑川は自分で驚いていた。とはいえ、これ以上みんなの前で拘

束され続けるのも嫌だったので、答えましたよ？　と、おどおどキャプテンの顔を見上げる。
「ん、それだけか？」
けれど返ってきたのは、無情にもそんなお言葉。まさかこんな目に遭うとは思っておらず、何を言えばいいのかわからなくなって半分パニックに陥っている彼の様子を見かねたのか、キャプテンが今度は真剣な顔をして、蓑川の顔を覗き込んだ。
「あるだろ。感じたことが」
たぶん、気づいてんのお前くらいだ。
見苦しいくらい焦り始めていた蓑川は、小さくつぶやかれた言葉に、ふっと平静を取り戻す。それは、先にずっと感じ続けていたあこがれが戻ってきたせいだった。
完璧なプレー。あこがれを抱いてしまうほど、隙のない。パニックが収まった彼の顔に、なにかを感じたか、キャプテンはまた、柔和な笑顔を浮かべる。
どうやら、それが答えらしかった。
「言ってみ？」
目を前に戻すと、こそこそやっている彼らを、さらにいぶかしげな目になって見ている一年のみんなの姿。高いところで地上を見下ろしてしまったかのようにぶり返してくる緊張を、乾いた唇を舐めることで抑えつけ、ゆっくり言葉を紡いでみる。
「先輩たちのプレーのことなんですけど……」

感想を言い終えたとき、一年はみんなして驚いた顔をしていた。
気が付かなかった。惨敗はそういうことか。
そんな、まるで新発見でもしたような顔を、一様に向けていたのだ。
「ま、そうだな。完璧なんて言われっと恥ずいけど、そういうことだ。俺らのチームの目指すところは、“ミスのないチーム”だ」

侮るなかれ。なかなか辛いぞ、そうなるのは。
言いながら、真剣な顔して、座る一年たちを眺めてく。
そして、一通り全員を眺めて満足そうに息を漏らすと、また蓑川に向き直って何かを渡した。
「はいよ、これ」
それは、一枚の紙だった。
意味が分からず戸惑う彼にキャプテンは言う。
「これ、お前らの代の星取表ね。碁盤目状になってんだろ？　そこに、試合で勝てば白丸、負ければ黒丸を書いてって。お前、まめそうだから適任だ」
そう言って、また笑った。

「先輩」
誰かが「なんで相撲……」とつぶやいたのを聞きつけたキャプテンが、星取表を使いだした過去話を朗らかにする間に、未だに先輩へのむき出しの闘志を見せる永山が手を挙げていた。
「なんだ？　えーっと……」
「永山です。で、早速さっきの結果を書き付けましょうよ。俺らが、今日の結果を絶対忘れないように」
そう言ってキャプテンを見る彼の眼は、射殺さんばかりの力を秘めていた。紙なんかに記さなくても、もうすでに心に黒い星を刻み付けていることが明らかなその眼。
キャプテンは、その様子に嬉しそうに少し目を細めて永山を見る。けれど、黙って振った首は横向きだった。
「なんでですか！　一年だからどうとか、そんな理由なら要らないっすよ！　俺らは……」
「あー、違う違う。そうじゃなくて」
「なら……」
「いや、だからな？」
聞け。そう目で語り、永山を黙らせたキャプテンは、一度ゆっく

りと一年を見回すと。
「……はあ」
唐突に、ため息をついた。
「ほら、早く言えよ」
「くせーからな、気持ちはわかるけどよ」
「伝統だぞ」
「いえ」
途端、ずっと黙って話を聞いていた三年生がキャプテンを茶化し始めた。うるさい三年を睨み付け、意味がわからず困惑する一年を一瞥したキャプテンは、やっと覚悟が決まったように表情を引き締める。
なにが起こるのかよくわからず、妙な緊張感に包まれた一年の顔も、つられて真剣なものになる。
そして、キャプテンは声を張った。
「ようこそ、このバスケ部へ！　お前たちは、この酷い歓迎を受け、この体育館を走った！　もう、中学は卒業だ！　今、これから、お前たちはここのバスケ部だ！」
さっきの試合は、一応まだここに入る前の試合ってカウントするから、ノーカンなのな。伝統だから。
くさいセリフに恥ずかしくなったか、似合わず顔を赤くして弁解するように言うキャプテンの後ろで、誰かがぼそりと「っていうか、部内の試合はカウントしねえし」とつぶやく。
つい言った弁解を否定されて、なお恥ずかしそうに切れるキャプテンを余所に、二、三年全員が一斉に盛り上がる。
「ようこそ！」
「地獄へ！」
なにもかも唐突に、先輩方の美しいプレーと騒がしいのりを、拒否する間もなく見せつけられた。
これが、始まりだった。

三、

それから、もう二年以上がたつ。

蓑川たちを初っ端から挫折させてくれた先輩たちはその後、一度も負けることなくいなくなった。全国大会の舞台で嬉し涙をこぼした先輩たちは代替わり時に行う試合で、後輩を存分に負かし、笑って卒業していった。

「最後くらい、リベンジさせてくださいよ」

そう言って笑っていたのは、たぶん野口だ。

横で悔しげに歯ぎしりしていたのは、永山だ。

そして蓑川は、その頃すでにベンチだった。

練習にはきちんと参加しているし、体力がつかなかったわけでもなければ、むしろスリーポイントの精度を増してさえいた。

そんな中で、彼がベンチだった理由は、二つあった。

まず第一に、幾度も言うようだが味方が強すぎた。

確かに蓑川も上達したかもしれない。けれど彼は、百九十を超すような身長を手に入れていなければ、常人離れのキレを持つドライブができるわけでもない。内外、どこでも暴れられるような機動力、突破力も持っていない。シュートの正確性でさえ、ほぼ全てのシュートを綺麗にネットに収めてしまうような力を、持つことはできなかった。

外敵以上に、試合に出るために倒さなければならない内敵が強すぎた。

そして、理由はもう一つある。

そっちがむしろ、重要なことであった。

その才能を持ってしまったがゆえに、プレーをすることを許されなかったとしても。

インターハイ予選を圧勝で勝ち上がった蓑川たちは今日、インターハイ本選の舞台に立つ。
選手たちの緊張は、さすがに大きかった。いくら二度も雰囲気を体感しているといっても、ただ見ているのと、実際その舞台に立つのではまるで意味が違う。連覇を果たさなければならないという重圧もある。
みんなの動きはどこかぎこちなく、すっころびかける人を見ても、広がる笑いはさざなみ程度。
ようするに、かなりやばい状態だった。
「おい、お前ら緊張しすぎ。もっと気楽にいこーぜ」
そんな中で口を切ったのは、やはり野口だった。軽薄そうな笑みを浮かべてみんなを見渡す野口の姿に、「こいつは気楽でいいよな」と言わんばかりの軽く呆れた視線が集まる。
「だって、これからインハイだぜ？　今までの試合とはまるで重さが違うじゃんか」
つい、雰囲気に流されて言葉を出した百九十台の臆病者。言われた百六十台のお調子者は答える。
「そりゃ確かにこの重さはやばいけどよ。だからこそ、こんな雰囲気味わえるなんて、これっきりってこと考えてみ？　わいてくるだろうが」
「何がだよ……」
胃が痛いとか言いそうな青白い顔をしたもう一人の百九十台が、ぽつり言う。
「そりゃお前、こんな場面でわいてくるっていえば……」
「闘志、とか言いたいのか？　随分格好いいこと言ってんな、膝がくがくで」
少々沈んだ雰囲気のなかで、唯一淡々とした面持ちの永山が、バッシュのひもを丁寧に結びながら突っ込みを入れた。
見れば確かに、野口自身の足も少々頼りなくふらついている。そ

れを見て取ったのっぽ二人組が、小さく笑った。
「…うっせーよ、永山！　俺は知ってんだからな！」
「何をだよ……」
笑われたことに気分を害されむきになる野口に、永山は面倒くさそうに反応を返す。
「お前は、緊張してるときほど口調がぶっきらぼうになる！　ついでに言うと、バッシュのひもをこんな早くからきっちり結んでること自体、緊張してる証拠！」
してやったりと言わんばかりのしたり顔をする野口を一瞥した永山は、ため息を一つついた後に、ちらと蓑川を見る。
肩をすくめて「俺は関係ない」と示す蓑川の様子を確認すると、また面倒くさそうにため息をついて、もう一度野口に向き直った。
「……」
無言で。
「な、なんだし」
若干動揺する野口を、気にせずじっと見つめ続ける。
「いや、だからなんなんだよ」
勝手におろおろし始めた野口の様子に満足したのか、けれど表情はピクリとも変えないままに、二人の掛け合いに吹き出す寸前の他の選手に声をかける。
「んじゃ、いったん外集合」
野口の「結局なんだったんだし！」という抗議は、全員に黙殺された。

すっかり緊張もとれたらしい黒ジャージ姿の集団が集合すると、永山がおもむろに口を開く。
「さて、今日からインハイだ。まあ初戦から負けることはないと思うが……」
「……俺の記憶違いじゃなきゃ、あの向かいにいる奴ら、その初戦

の相手だよな？」
野口が、ぼそぼそと誰かにつぶやくのが聞こえた。
「……まあ、とりあえず気は抜くな。初戦とはいっても、負けりゃそこで終わりの大事な試合だ。一試合一試合集中して、きっちり勝って」
そこで言葉を区切ると、どこか不機嫌そうな野口を見て少し笑い、もう一度、口を開く。
「ま、楽しんでこーぜ」
おう、という野太い声が、廊下に響いた。

「んじゃ、蓑川頼むわ」
「ん、了解」
気合注入の終わった永山が、いつも通り、蓑川に代わる。
蓑川も普通な顔をして、みんなの前に立つ。
「んじゃ、今回の試合の作戦と、あと向こうのチームの情報流してくわ。で、今回は相手さんのインサイドがかなり弱いから……」

蓑川が試合に出ていない、もう一つの理由。
それは、彼の持つ冷静さだった。
先輩との試合の際、プレーに夢中になるあまり、先輩の強さがなんだったのか、まるで考えられていなかった連中の中で、唯一蓑川だけがそれに気づいていた。
バスケ経験は誰しも長い。だから、コートの外で見ていたものがいれば、何も蓑川でなくても簡単に気づけただろう、その針の穴を通すような正確さと、その穴を外さない確実さを。
けれどプレー中にそれに気づくには、冷静に、言い換えれば第三者的に試合を見て、客観的に試合を分析するほかない。
それが、蓑川の力だった。

第一の理由とともに、コート外でのほうが発揮されやすい才能。

二つを持ってしまった蓑川が試合に出られないのは、仕方のないことであった。
それに、冷静さというものは、逆に蓑川の欠点でもあった。
のめりこむことが、できないのだ。
バスケは楽しいから大好きだった。けれど、勝利に対する執着というものが、彼には明らかに欠けていた。本当に嬉しそうにプレーをできるけれど、ボールを取られたから取り返してやる。シュートを決められたから決め返してやる。といった闘争心が、ほとんど見られなかった。むしろ、ボールを取られたら申し訳ない。シュートを決められたら、ごめんなさい。そんな気弱な仕草しか見られない。
そんな選手が力を発揮できるかと言えば、残念ながら答えは否だ。
だから応援席で、ひたすらゲーム全体を眺めていた。チームの弱みを直し、敵の強みを崩すために。
そうして、蓑川は過ごしてきた。
ときどき暴れだす試合への欲求さえコントロールできてしまえば、あとは何も残らなかった。

蓑川の機械的な説明は、選手の頭に刻まれていく。
言われたことをきっちりとこなし、その中で蓑川に新たな課題を見つけてもらう。そして、克服する。
重圧を克服し、今までどおりを今日も貫く選手たちは、汗を光らせて笑顔を浮かべる。
また、一つ。
白星、いち。
もう一度。
白星、に。

四、

インターハイ初戦を乗り越えた蓑川たちはその後、うまく波に乗り、勝利を重ねていった。
ときどき危うい試合も経験しながら、けれど最後にはきっちり差をつけて勝っていく。ハイレベルな試合は消耗も激しかったが、二年以上を費やしてきた高校バスケ、その最後に経験する試合が全力を持ってぶつかり、もぎ取るという表現がふさわしい形で勝利を得るようなものでよかったと、心底思っていた。

そんな試合を重ねていくにつれ蓑川は、たまっていた鬱々とした感情が、いつしか収まるのを感じていた。インターハイに入ってから、本格的に監督という立場になって指示をだせるようになったせいか。あるいはみなが持って帰ってくる勝利のすべてに、自らの力がちゃんと上乗せされているのだという実感が得られたせいかもしれない。
とにかく彼は、いつも渦巻いていたたくさんの暗い感情のすべてに決別をし、純粋にチームの優勝を願い、チームの一体感の中で、選手とともにプレーをしていた。
監督というポジションを得て。

生きているようにコートを飛び回るボールが、まるで自ら望むように軽快に、ネットを揺らす。それを見て、全力で喜び、同時に全力で指示を飛ばしていく。
今までにないほどの好調子で試合を進めていく。何者にも負けやしない、そんな根拠のない自信が、皆を包んでいった。

そして、飛ぶように過ぎ去る時間は、ついに決勝にたどり着く。
選手たちは控え室の中で、それぞれがそれぞれの方法で、これから向かう試合に向けて緊張を高め、今にも叫びだしてしまいそうなほど高ぶる心を、まとめ上げていた。

インハイ初戦に見えたような緊張は、もうそこには見られなかった。自分ができることを、死ぬ気でやりきる。今まで重ねてきたそれを思い返し、今一度、心に刻み付けるだけだった。

「泣いても笑ってもこれで最後だ。ならどうせやるんだから、笑ってやろうぜ」

壁際に立つ蓑川は、控え室に入る前、もう大学二年になる元キャプテンがかけてくれた言葉を思い出していた。

「なんてったって、俺らは笑えたんだからな？」

高校時代と変わらぬ笑顔で「勝てよ」と激励をしてくれた元キャプテンが、他の誰でもない、自分に声をかけてくれたことを、蓑川は誇りに思っていた。

バスケの才能でいえばよほど優れている奴らばかりの中で、劣等感に苛まれる蓑川に、バスケ部での彼の居場所を作ってくれたのは、元キャプテンだった。初めての試合で彼の冷静さを見て取り、そして監督という立場を推した。プレーする才能に恵まれなかった彼に、孤独と居場所をくれた。

改めて思いかえす。

ベンチから試合をみつめていた、キャプテンの姿を。

俺は、あの人のようになれたのかな。

皆とプレーをできない自分に歯噛みをし、自分を本気で呪いながら、けれど自らベンチを選び、皆を笑顔で裏から支えることを選んだあの人のように。

答えの出ない問いが、頭の中に浮かんだとき、声がかかる。

「よし、じゃあ、外でっぞ」

永山の、今まで以上に強い静かな闘志を秘めたその声を聴いた瞬間、頭を泳いでいた問いは、霧散して消えた。

今は、目前の試合だろ？

永山の目が、そう言っているように見えた。

「じゃあ、作戦な。まず……」
いつも通り、それだけを思って言葉を流していく。最後だからどうとかは、なるべく気にしないようにする。今のこの雰囲気を、保たなければいけない。

作戦、敵チームの確認を終えたところで言葉が途切れた。いつもなら「じゃ、がんばろう」だとか、「勝とうぜ」だとか言ってミーティングを終わらせていた。けれど、なんだか今、そんな言葉を言うのはふさわしくない気がした。
突然黙る蓑川に対し、困惑した視線が集まる。別に大したこと言いたいわけじゃないけれど、何かピッタリな言葉はないかと言葉を探す。
気づけば、皆の目が不安げな色をたたえていた。間を開けてしまったがために、むしろ言葉を漏らしにくくなってしまった蓑川の様子が、皆の緊張を無駄にあおってしまっていたのだ。いい感じに整えられていた雰囲気が、崩れてしまう。
「あ、と……」
自分のせいでこの雰囲気を壊してしまうわけにはいかない。そう思った蓑川が、とりあえず何か言おうと口を開いたとき。
「どうした、蓑川。不安なのか？」
特にどんな反応をすることもなく蓑川を見ていた永山が、不意に言った。
振り向けばそこには、壁によりかかる永山が、嫌味なほど似合う不敵な笑みを浮かべている。
「大丈夫だろ、俺らなら。今まで勝ってきたんだ。今更こけねえよ。それに、監督が不安がってどうするよ？　お前は俺らの柱なんだからさ、どっしり構えてろよ」
「いや別に不安なわけじゃ……」
弱い声で否定する蓑川は、まだ言い終わってない様子の永山の顔

を見て、口をつぐむ。
「なら、黙りこんだりするなよ。みんなに伝染るぜ？　……と、なんか辛気臭えな。ま、とりあえずあれだ」
壁を離れ、蓑川の真正面まできた永山が、後ろにならぶ選手の代表のように、宣言する。
「俺らが、あんたに優勝を送ってやるよ、監督さん」
言い終えたところで、場が静まる。呆然とする蓑川と、未だ不敵な笑みを浮かべ続ける永山。
雰囲気をぶったぎったのは、やはり野口だった。
「……っくっせえな！　おい！　どこのスポ根だよ！」
そういって、大爆笑する。
つられて、みんなも少しずつ笑った。
いやそうな顔を浮かべる永山の顔を見て、つい蓑川も笑ってしまう。なお眉をひそめる永山の顔も、今は面白くて仕方がなかった。
けれど内心、蓑川は永山に感謝していた。
お前はおまえだろ？　気を遣うなって。
そう、言外に伝えられた気がした。決勝に向かう選手たちへの気後れは、永山の言葉でようやく消え失せた。
「……そうだな、不安がるのはまだ早いな。まずは楽しまないとな」
そーだぞ！　座っているみんなの中から、言葉が飛ぶ。
「じゃあ、そーゆーことで……俺の有能さを、証明してきてくれよ」
「おう！」
寸分も乱れぬ返事と笑い声がまた、廊下を叩いた。

ベンチに座って、はらはらと試合を見つめる蓑川の目の前で、スコアは常に変動していく。
十二対十四、劣勢かと思えば、
十四対十四、すぐに追いつく。

二十八対二十五、優勢かと思えば、
二十八対二十八、すぐに追いつかれる。
点を取っては取られ、取られては取りかえす。どうしようにも試合の動かない、点取り合戦。シーソーゲーム。
つかず離れずは続く。一ピリオドを終え、二ピリオドを終え。点差は、開かない。
「気持ち切らすなよ。疲れたろうけど、それは向こうだって同じだ。点差ついてないからな。手を抜いたほうが速攻負けんぞ」
肩で息をする選手に、タオルや飲み物を渡しながら、檄を飛ばし続ける。実際、これほど競った試合は初めてで、さすがの永山でさえも慣れないプレッシャーに消耗が激しい。
笛がなる。選手は水筒を置き、タオルを放り、コートに出る。
五人が作った円陣は、妙に歪な形をしていた。

後半が、始まった。
すぐだった。試合が傾くのは。

ともに四十点を重ねてはいたが、どこか決定打に欠き水平を保っていたシーソーは、敵側に傾いてしまった。
永山の集中がほんの少し切れた瞬間に、パスをカットされてしまったのだ。
それは、みなが目指してきた“ミスのない”チームを破られたことになる。さらに、そのミスを起こしたのが、部内最強であるはずの、永山。
チームの士気は、決定的に崩された。

二、四、六……。少しずつ、点差は開いていく。
明らかに集中が切れてきてしまったこちらに対し、敵はこの好機を見逃さずに、隙を見ては攻め入ってくる。
目立ったミスをするわけでもないが、どこか気迫が抜けかかった

プレーを続けるこちらは攻め入ることができず、ディフェンスも段々とざるになってくる。
点差が十五を超えたとき、たまらず蓑川はタイムアウトをとった。
「……わりい、俺のせいだ」
いつになく落ち込んだ様子の永山に、蓑川はかける言葉を見つけられない。負の雰囲気は一気に伝染する。他の選手でさえ、どこか葬式のような暗さを抱え始めていた。
まずいな……。
蓑川は、大きく危機感を募らせていた。気分が盛り下がってしまったチームは、たとえ力がはるかに勝っていたとしても、負けてしまうことがある。弱小チームにいたからこそ知る、それは勝負の鉄則ともいえる事実。
さらに、この試合での彼我の実力差は無いに等しい。
この雰囲気を打開しなければ、負ける。
そう、直感した。
「……とりあえず、お前のせいじゃないよ、永山」
頭にある言葉をかき集めて形にしていく。時間は限られている。
さあ、何を言う。
「これが、誰かのせいっていうなら、それはチームのせいだろ」
選ぶべき言葉はうまく見つからない。なら、がらではないけど、無理やり叱咤するしかない。
監督の言葉に何度も尻をひっぱたかれた経験を思い出し、少しずつ檄を飛ばしていく。
「センター二人。相手百八十そこそこだろ？　百九十あるくせになに負けてやがる。その足飾りか？　ちげーだろうがよ、走れ」
二人が小さく頷いた。
「フォアード二人。切り込み隊長は調子悪いみてーじゃんか。開始直後は怖いくらい勝手に突っ込んでってたくせによ。それにお前。スリーどうした、俺を負かしやがっといて、雰囲気に押されてんじ

ゃねーよ」
片方は頷く。
けれど野口は、歯ぎしりの音を漏らしながらにらみつけてくる。
「んだよ。文句あるなら言え」
蓑川はあえて、挑発する言葉を選んだ。これで乗るなら、力は残っている証拠。乗らなくても、イラつかせられれば十分だ。それだけで野口は冷静になれる。怒れば怒るほど、それをうまく敵にぶつけてやろうとする腹黒い奴だから。
野口は、なにも言わなかった。にらみつける目を伏せて、顔を俯ける。
それが蓑川には、次の狩りに備えてを牙収める、猛き獣のように見えた。
「で、キャプテン。どした？」
そして最後は、どこか調子の悪そうな永山。不敵な笑みを浮かべたほんの二、三十分前の様子はどこへやら。今はおびえて縮こまってしまっている。
「……ああ、わりい。なんか、最初のミスが染み付いちゃってさ。こう、調子がでねーっつか……」
小さく、手のひらを開いたり閉じたりしながら、自信なさげにつぶやく。
「……前に、初めて先輩たちとやった時みたいになってて……」
なるほど、と思う。
そう言われれば、蓑川にもわかった。先輩たちとの試合をしたとき、完璧なプレーに見惚れ、悔しさを覚えた一方で、同時に蓑川は、恐怖を感じていた。
どこにパスをしても、カットされる。ドリブルにいっても突破できない。シュートを打ってもブロックされてしまう。完璧なプレーは、いつしか選手たちに、そんな思いばかりを植え付けてくる。四方をふさがれてじわじわと追い詰められていくような、そんな恐怖

を、彼は二十分常に感じ続けていた。

永山がそういう恐怖におそわれるとは、意外だった。いつでも自信満々に見えて、実のところ蓑川の抱く程度の恐怖を、感じていた。妙な親近感がわく。

けれど、永山と蓑川では、違うところがあった。

それは、蓑川は負けに慣れているということ。

そういうときに、どうしてやるべきかなんて、簡単だ。

「お前、自己中だな」

わざと、むかつくように言い放つ。なるべく辛辣に、心に突き刺さるように。そして、その痛みで心が跳ね起きるように。

「俺らが目指してんのが、あの先輩たちのプレーだろ？　それを俺たちは、実践してきたんだ。お前はずっと、今感じてる恐怖を、与えてきてんだぞ？　今更、自分がやられてびびってんじゃねえよ」

永山のこぶしが、閉じられたまま止まる。

「さっき、俺が柱だって言ったよな？　んなわけねえだろ。あくまで俺は監督で、立ってる場所はベンチだ。みんなの真ん中にいない柱が役に立つ分けねえだろ」

こぶしに、力がこもる。

「お前は、キャプテンだ。お前が、柱なんだ。折れてんじゃねえよ、もろいな。最後まで耐えてやがれ」

タイマーが、なった。

永山の目が、前を向いた。

五、

壁に貼られた、微妙に傾いだ紙を見つめる。

沢山ならんだ白い丸の隣に空いた白い空白を、白い丸で埋める。

「白星、いち」

そう、呟きながら。
後ろにならぶ選手たち。涙を流している者がいれば、冗談をいて笑い合っている者もいたけれど、全員が一様に、やりきった充実を顔に浮かべていた。

と、唐突に動いた永山が、紙の左上にかぶさるようにかかっていたカレンダーをめくる。
「ま、真っ白とは、いってないけどな」
そこにあったのは、真っ黒に塗りつぶされた、丸。
「黒星、いち、だ」
野口が、珍しく静かにつぶやく。

先輩たちに完敗したその日。
ミーティング後に、永山と野口は紙を持ったまま所在なさげにする蓑川に詰め寄っていた。
「勝手に黒丸つけちまえ」
「せっかく負けたってのに、黒丸書いちゃダメってことはないよな」
突然そんなことを言い出す二人に、さすがに蓑川も困惑する。
「いや、だって今日のは省けって言われ……つか、書いたら怒られんの俺だけじゃんか」
そう嫌そうな顔をして反論した。
けれど二人は気にするどころか、逆に楽しそうな顔をして、
「じゃあ、しょうがないか」
と言って笑いだす。
なんとなく嫌な予感がした蓑川が逃げようとすると、野口と永山は、さっさと蓑川を捕まえて、紙を奪ってしまった。
「……で、なんでサインペンだよ！　消せねえだろ」
紙を奪われた挙句、黒丸をサインペンで黒々と書かれた蓑川は、半ば泣きそうな顔をしながらため息交じりに言う。

「まあいいじゃんか。ここめっちゃいろいろ貼ってあるから、裏に隠せばばれやしないって。それにさ」
「消えねえほうがいいって。どうせ、このお調子者のばかとかが、勝ちまくったら慢心し始めんだろ？　そーゆーの戒めるためだよ」
永山はそういって、部室のカレンダーの裏に、その紙を貼った。
「なんだその発言！　……“慢心を戒める”だってさ。イケメンはいうことも格好いいね、まったく」
「んだよ、このちびざるが！」
まだ、永山が野口のからかいに反応していた頃の話。

「でも、よくばれてないよな、これ。まあ、ばれたからと言って怒られるとも思えないんだけどさ」
紙を見つめながら、誰かがつぶやく。
それに、蓑川は首を横に振った。
「いや、たぶんもうばれてるよ」
「えっ？」
驚いた顔をする野口に、至極当然のことのように永山が説明する。
「カレンダーなんかの裏に貼ってたんだ。今思えばばかだよな。カレンダーめくる回数なんてどれだけあると思うよ？　ばれねえわけねえだろうよ」
「ま、知ってて黙ってたんだろうけど」
「でも、なんで……」
蓑川が挟んだ言葉に、野口が疑問をはさむ。
「まあ、俺の予想だと……」
「先輩たちも同じ事やってたんじゃない？」
永山の言葉をさえぎり、蓑川が言う。
「考えてみれば、俺ら一度も先輩たちのこれ、見たことねえよな。まあ、俺らも後輩に見せたことないけどさ。きっと自分らもやってて、俺らの紙見て、笑ってたんだろ」

「それに、紙渡されて次の練習ん時に、俺キャプテンに『お前らもやるなあ』って笑われたし」
愉快気に話す永山の声が途切れると、部室には沈黙が下りた。
静かな部室の中で、沢山の白い星に囲まれた中に一つ浮かぶ黒い星だけが、存在を主張している。
すべての始まりであるその黒を見つめ、全員がこの三年間を思い返す。

主のいなくなった部室に残されたその紙は、その黒星は。
闇に溶けて、見えなくなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6825v/

黒星、いち。

2011年8月11日03時37分発行